気になる日本語

国立病院機構東京医療センター
副院長
臼井　宏

昨年春から編集委員をさせていただいています．ひと様の原稿を査読するなどという大それたことをしなければならなくなり，そのたびに自分自身の日本語の「語感」，「センス」といったものが果たして一般的なものなのか悩むことになります．そして，今まで何となく気にはなっていたものの半ば無意識的にひっかかりを感じていただけの，話し言葉に対する違和感もはっきり意識することが多くなってきました．例をいくつか挙げさせていただきます．

数年前，若い看護師さんたちが，報告や申し送りをする時に「お熱の方ありません」，「血圧の方150台の80台で経過しております」というように何でも「ほう」をつけるのが気になって仕方なかったのですが，あれは最近ほとんど聞きません．その間に私は病院を変わったので，局地的な流行だったのでしょうか．

同じく若い人が頻繁に使う言葉で気になるのが，「～みたいな」です．もちろん，「～みたいな」という言い回し自体は正統な日本語で，「山みたいな大男」，「『お前が悪い』みたいな言い方」など何の問題もありません．しかし，「げーみたいな」，「何やってんだよみたいな」と言ってそこで切ってしまう言い方を繰り返し，相手もわかったという顔をしているのをみると，「日本語はこんなに貧困な表現しかできない言葉だったか，もうおしまいだ」と悲しくさえなります．

研修医の先生たちは，同世代の平均に比べればしっかりした教育を受けてきただろうと思いますが，自分の父親を「うちのお父さんは～」というように言う人が多数です．若い人が「うちの父は～」というのを聞くとそれだけで何かほっとした気持ちになります．私だけのことかもしれませんが．

しかし，気になるのは若い人の言葉だけではありません．会議や講演でもよく耳にする言い回しのひとつは，「～のかな」です．たとえばこんな言い方です．「私も○○の普及に努めてまいりましたが，最近ようやく成果が挙がって来たのかなと感じています．」私は「挙がって来たのかな」という言い方は，普通は挙がってきていないと思う時に使うものと思っていました．「挙がって来たと人は言っているが果して本当なのかなあ」と怪しむ気持ちだと思うのです．下線部のような使い方を頻繁に耳にすると，しかも同世代の人たちが使っているのを聞くと自分だけが間違っているのか，自分が古いのかと自信がなくなってきます．

言葉は生き物とよく言われるように，言葉は徐々に変化していきます．正しい，正しくないという基準は一定のものではなく，本当はきわめて流動的なものなのでしょう．たとえば，「この電車は乗車券だけでご乗車できます」という駅のアナウンスは誤りで，「～ご乗車になれます」と言うのが正しい言い方であるいうのが定説だったはずですが，今は前者も正しい言い方と認知されてきているようです．流れに抗っても仕方ないのだ，と思う一方で，違和感のある表現が増えることにいらいらがつのります．

「日本語八ツ当り」を書いた江國滋さんもとうに亡くなりました．「老いの繰言のようなことを言っていないで，収入増加の方策を考えるのがお前の仕事だろう．」と言われないうちに筆を擱きましょう．